

トピックス

意見交換会（要旨）

松永剛氏（原子力機構）：JT-60SA の運転開始に向けて人材を確保する必要があるが、運転開始までの間にこのコミュニティで具体的に何か考えておくべきことはあるか。

高瀬雄一委員（調整委員会）：東大では核融合の研究者を育成する教育プログラムを二年前から始めている。教育の体系化を行い、広い意味で何が必要かを意識して教育をしている。大学でできることは予算的に限られているが、多くの実践的な経験をつむことができる。さらに LHD などと共同研究を行い大きな規模の研究について経験を積ませ、JT-60SA や ITER に向けた人材として育成していければと考えている。

松田慎三郎委員（運営会議）：大学では QUEST の実験が開始しているが、若手の研究者はどの程度参加しているか。

吉田直亮委員長（ITER・BA 技術推進委員会）：教授 4、5 人に対してかなりの学生が研究している。10 人よりもっと思う。

高瀬雄一委員：我々も 10 人程度、小野靖先生のところも 10 人程度いて、全体では結構な人数がいるが、折角ドクターをとっても研究職（出口）がないことが悩ましい。

吉川允二氏：国外との垣根をできるだけ下げることがあると思う。ITER と JT-60SA の関係、および JT-60SA と中国や韓国の核融合計画（EAST や KSTAR）との関係は、それぞれ場合によっては対立関係になるおそれがある。垣根を下げてお互いに役立つような研究を行い、議論を頻繁に行って進めてほしい。また、核融合に対する、日本全体、国民一人一人の理解を深める必要がある。そうでなければ、核融合に長期的な明るい展開があるとは思えない。国内的にも国際的にも垣根を下げて日本の将来の科学研究の見本になるような研究をして欲しい。また、テレビを通じるなどして、核融合の研究が日本の将来に如何に役に立つかを多くの国民に理解してもらうことが大切だと考える。

松田慎三郎委員：今のご指摘である国際的な垣根を下げるということは、若い研究者が育っていくのは国内だけではないという意味で重要なメッセージであると思う。例えば、KSTAR 計画の枠組みなども若手のチャンスだと思う。

鎌田裕委員（調整委員会）：KSTAR は超伝導、非円形断面であり、ITER や JT-60SA でやっていくべきコミッショニング、プラズマを使ったコミッショニングは学ぶところは大きい。KSTAR とは既に研究協力を始めている。国内のコミュニティの方々と一緒に ITER、JT-60SA そして他の装置に展開していこうということをこのフォーラムで議論しているが、今後、具体化していくことが大事であると考えている。

高瀬雄一委員：私自身も重要だと思っている。我々 ST では MAST や NSTX との共同研究もしている。MAST の研究ではドクターを 2 名出しており、客員研究員として海外からの研究者も受け入れている。ただし、枠組みと予算がないと難しい。

佐藤文隆議長：京大で感じたのは、素粒子実験などのビッグサイエンスは、ほとんどのグループが KEK や宇宙研と協力して研究を進めたが、教室には設備がなく学生がどんどん減っていった。大学に何か装置がないと学生は残らないので教育の場では気をつけなければならない。

高瀬雄一委員：小さい規模でも学生が実験できる環境を整えておく必要がある。ST は比較的安くできるので、講座単位でトカマク・プラズマ研究ができるように、この体制は死守したい。